

英語を勉強し、 夢を追いかけるキミたちへ

山形県の公立中学に通っているときに英語の楽しさに目覚め、

アメリカの大学で学び、教えるようになった斉藤淳さん。

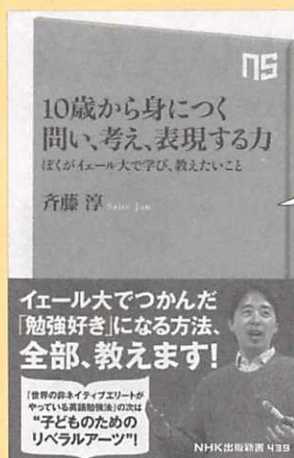
今は日本の子どもたちに英語を教えています。

『基礎英語』を聴いているみなさんにメッセージをいただきました。

◆自分の頭で考えるために

人々の交流が世界規模で活発になり、情報が大量に簡単に手に入るこれからの時代には、「自分の頭で考える」ことがますます大事になってきます。そのための土台作りとして、学校の勉強だけでなく、古典を読んだり、最新の学問や技術について調べてみたりすることは大事です。人間が歴史のなかで積み上げてきた知の大きさにふれ、そこと自分がつながっていると実感すると、学ぶことがぐっと楽しくなります。

「なりたい大人」になるための 学びのコツが満載！



勉強の
ゴールは
受験じゃない！

NHK出版新書 439

『10歳から身につく 問い、考え、表現する力
～ぼくがイエール大で学び、教えたこと～』

斉藤 淳：著 定価：本体780円＋税
新書判並製 256ページ

だから僕は子どものころから本が大好きでした。田んぼしかないような田舎で育ちましたが、自分の知らない世界に思いをはせると本当にワクワクしたものです。

◆10代のうちにいろいろな経験を

感受性の豊かな十代にとって、読書と同じくらい大切なのはいろいろな経験をしておくことです。将来、難しいことを学んでいくときに、自分の経験をとっかかりにして具体的に考えることができるからです。

キャンプや農業などを体験してみるのもいいし、クラスでもクラブでも地域の活動でも何でもいい。いろいろな場で汗をかいたり、他人のために働いたりする中で、どうしたらみんなの役に立てるか、他人に評価されるというのはどういうことかなどについても、感覚として学ぶことができます。

紙に向かって答案を書く練習はテストにしか役立ちませんが、体験から学んだ知恵は将来、どんなことをするにも活かされると思います。

◆もし相手が自分だったら？

グローバル社会では、自分とは異なる価値観や異なるアイデンティティで育った人達との交流があります。そのための、自分の育った環境、今いる環境をよく理解しておく必要があります。さらに、相手と



さいとう・じゅん 1969年生まれ。「J PREP 斉藤塾」代表。元イエール大学政治学科助教授。2012年に山形県と東京都で英語と教養の塾を設立、日本の子どもたちに学ぶ喜びと作法を教えることをミッションとして講演やメディア出演など幅広く活動中。

保護者の方、先生方へ

「育つ力」を信じてサポートを

私は米国の名門教養大学・イエール大で10年間、学び教えた経験があります。日本の教育にもアメリカの教育にもそれぞれ長所も短所もあると感じています。しかし、あえて日本の教育の難点をひとつ挙げるとしたら、試験をゴールとして勉強が組み立てられる結果、どうしても「正解を覚え込ませる」ことになりがちなのが指摘できます。これから「新しい価値」を見つけることがますます求められる時代にあって、その土台となる「教養」の大切さが忘れられがちなのは残念です。

そんななかで日本の教育者、または大人に望むことは、“とんがった”子どもを「つぶさない」ことですね。自由な雰囲気なかで好奇心を持つことさえできれば、子どもには自ら育っていく力があります。そして、その成果は短期では出ないことがほとんどです。目先のテストの点数が気になって、あれもこれもと対策をさせたい親心はよくわかります。でも、“手を出さない”“じっと見守る”我慢をすることも、教育の大切な一要素だと思います。

自分とのあいだにどんな違いがある場合にどう振る舞えばいいのかを考えるため、お互いの役割や立場を置き換えてシミュレーションしてみるといいと思います。

例えばディベート。じゃんけんで賛成反対を決め、本来の自分の意見とは違う考えを代弁する練習をします。そうすると多角的に物事を考える習慣がつかます。

◆キミの個性は何だろう？

アメリカ時代には、世界中から集まった人たちと一緒に学んだり、教えたりしました。そこでわかったのは、アーリースターター（すぐに始める人）もスロースターター（なかなか始めない人）もいるということです。

大人にも子どもにもいろいろな人がいます。そして、時代はいつも変わっていきます。

その中で自分の個性を知り、自分の好きなことを探していってください。

自分なりに、自分にとって何が“幸せのもと”なのか、「なんとなく」考えていることを「明確に」言葉にして整理し、表現することが大切です。

たとえそれが途中で変わったっていい。思うように行かなくなってもいい。僕なんて中学時代は思うように行かないことだらけでしたから。でも、たまたま英語に興味を持ち、英語を道具として日本とは違う国の文化や人々のことを知る喜びを知りました。そう、英語は自分の幸せは何かを探すためのツールです。英語を勉強するというのは、結局、幸せ探しの道具を手に入れるということなのかもしれません。そして、キミがそれをきくと見つけてくれると僕は信じています。

英語ができれば、

Hello! WORK

「英語ができれば、^{しょうらい}将来どんなことができるの?」...そんなみなさんからの疑問にこたえるべく、
英語や外国での経験を生かしながら日本や世界で活躍するさまざまな方にお話をうかがいます。

文：高橋和子 写真：編集部

FILE. 6 前編

英語塾経営者

斉藤 淳さん

Saito Jun

J PREP 代表。上智大学外国語学部英語学科卒業。同大学国際関係論専攻博士課程前期課程修了後、カリフォルニア大学ロサンゼルス校大学院を経て、イェール大学大学院政治学専攻にて博士号(政治学)取得。フランクリン・マーシャル大学助教授などを経て、2008年イェール大学政治学科助教授に。2012年に帰国し、東京都と山形県で英語と教養を教える私塾を創業。著書に、『世界の非ネイティブエリートがやっている英語勉強法』(KADOKAWA / 中経出版)、『10歳から身につく問い、考え、表現する力 〜ぼくがイェール大学で学び、教えたこと』(NHK出版)など。



国際社会に通用する
英語力や議論する力を
持った人材を育成する仕事

— まずは、斉藤さんが経営されている英語塾についてお聞かせください。

わたしが経営する塾では、中学生と高校生を中心に英語

を教えています。国際社会に通用する、話す力、聞く力、書く力、読む力、それに加えて、自分の意見をしっかりと持ち、表現し、話す相手と活発に意見や価値観を交換できる力が養えるような英語学習の場を提供しています。

— 単に受験に備えるだけの

英語学習ではなさそうですね。

そうですね。わたしはアメリカに留学経験がありますが、そのときに、日本の英語教育について疑問を持つようになったことが、現在の仕事の原点です。留学前、予備校で英語を教えていたときに、学校のテストや難関校の受験で高得

点を取るような学生が、英語が話せない、聞き取れない、書けないという状況^{じようきよう}をたくさん見てきました。韓国^{かんこく}の大学で国際政治を教えたこともあります。韓国の大学生は、留学経験がなくても英会話能力があつて、それなりにしっかりした英文も書いていました。このちがいは、明らかに教育のちがいによるものだと思います。自分の塾を立ち上げたからには、本当に必要なスキルを教えようと決意しました。

——斉藤さんが自分の将来について考えるようになったのはいつごろですか？

わたしは山形県酒田市^{やまがたけんさかたし}で生

まれ育ちました。米どころとして知られる土地で、実家も米農家です。長男だったので、家業^{いけ}を継ぐという将来を考^{かんが}へざるをえませんでした。その反動もあつて、世界を飛びまわっている人にあこがれ、特にNHKの報道記者にあこがれました。きっかけは、小学生のときに毎週見ていた「海外ウイークリー」という情報番組。海外特派員^{とくはいいん}として活躍した平野次郎^{ひらの じろう}さんがキャスターをつとめる番組で、英語が堪能^{たんのう}な平野さんがかつこよく見えたのです。中学に入ると、ジャーナリストになりたいという思いを強め、自分なりに準備を始めました。

——どのような準備を始めたのですか？

まず、短波放送で世界各国のニュースを聞き始めました。学校では新聞委員会に入り、仲間と作った新聞は、中学2年生のときには文部大臣賞、3年生のときには総理大臣賞を受賞しました。これでますますその気になって(笑)、田んぼの稲刈り^{いねかり}を手伝ったおこづかいでアメリカの情報誌「ニューズウィーク」を定期購読^{こうどく}するようになりました。ただ、学校の英語の成績はそれほどよくありませんでした。わたしの場合、受験英語ではなく、ジャーナリストになるために必要な英語を学びたいと思って

アメリカの教育現場では、
課題を見つけて周囲に問いかける
能力^{じゆうし}が重視される。
日本とのちがいを感じました。



いました。ジャーナリストはコミュニケーション力も必要ですから、地元に住む数少ないネイティブスピーカーとの交流会を企画したり、そこで知り合った外国人と個人的に遊びに出かけたりして、実際に会話する機会を作っていました。今、振り返ると、アメリカに留学して役立ったのは、テストに備えた英語だけではなく、ジャーナリストを目指して自ら学んだ英語でした。

最初のアメリカ留学で 学問の楽しさに目覚め、 イエール大学へ

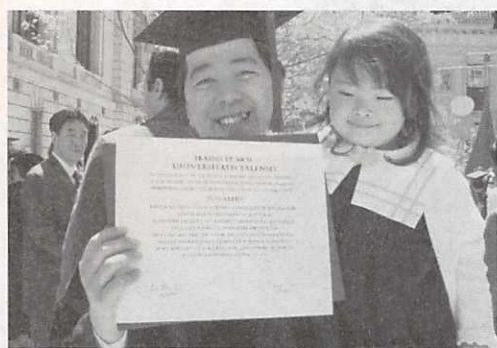
——高校卒業後は、日本の大学の外国語学部英語学科に進み、英語力をさらにみがくとともに、社会科学や政治学も学んだそうですね。

そうです。また、留学制度のある大学だったので、3年生のときに制度を使ってカリフォルニア大学に留学しました。この体験が、わたしの人生を変えました。学問の楽しさに目覚めて、もっと学びたい、そしてどうせ学ぶなら、最先端の学問ができる環境で学びたいと思うようになったのです。当時学んでいた社会科学や政治学の最先端と言えば、イエール大学でした。そこで、日本の大学を卒業後、イエール大学の大学院を目指しました。ここに入るには、英語力はあって当然で、専門分野で光るものがなければなりません。わたしの場合、すでに日本語で出版した論文がありましたので、日本の政治制度に関する論文を英訳してイエール大

学に送り、それが評価されて入学がなきました。ちなみに、学費も生活費も奨学金でまかなわれ、経済的な負担なく学ぶことができました。

——どのような大学院生活でしたか。

1日平均15時間は勉強していました。膨大な資料を読み込み、教授とのディスカッションでは、自分の意見の裏付けとなるデータも求められるので、その準備も必要でした。アメリカの教育現場では、学生自身が何かしらの課題を見つけ、それを周囲に問かける能力が重視されます。既存の問題にこたえていれば好成绩が取れる日本の教育現場とは大ちがいです。社会に出たときにいちばん大切なのは、新しい課題を見つけて世に問う能力です。たとえば新商品の開発も、既存にない問いかけがあるからこそ人々の心を動かし、他社より優位に立つこともできる。外交もビジネスも、受動的にこたえているだけではリーダーシップやイニシアチブを発揮できません。アメリカの大学でそうしたことをつくづく実感し、日本の教育現場は変わらなければいけない、自分の経験が生かせる



大学院の学位授与式での1枚。娘さんと一緒に。「イエール大学の大学院では、政治学の博士号を取得しました。イエール大学での学生生活や経験を適して、日本で教育の土壌を育むという大きな目標を見つけました」。



話す力、聞く力、書く力、読む力、
自分の意見を持ち、表現し、
ディスカッションできる力が養える
学習の場を提供しています。

のではないかと考えるよう
になりました。もとはジャーナ
リスト志望でしたが、「教育」
という目標を見つけたのです。

**複数の大学で教え
イエール大学助教時代は
学生寮の舎監に**

——博士課程修了後、教育を
する側へと進んでいかれました
ね。

ウェズリアン大学、次いで
フランクリン・マーシャル大学、
次いでイエール大学で教鞭を
とりました。イエール大学の
助教時代は、学生寮のひと
つ「セイブルック寮」の舎監(学
生寮などで、寄宿している学
生の生活指導や監督をする役
割のこと)をつとめ、3年間に

わたって学生たちと寝食をと
にもしました。

——なぜ、舎監をつとめよう
と思ったのですか？

今の時代は、一流大学の講
義が受けられる動画サイトな
どが無数にあり、ネットを通じ
て最先端の勉強ができるよう
になっています。しかし、実
際に大学に足を運ばなければ
体験できないことがあります。
それは、キャンパスにおける
日常体験やネットワークです。
学生寮はその最たるもので、
しかもこのような環境は日本
には少ないのです。だからこそ、
日本の教育の未来を考えるう
えで、ぜひ体験しておくべき
だと考えました。寮にはいろ
いろな専門分野の学生や教員

たちが暮らしており、分野を
越えた交流ができることは、
非常に魅力的でした。優秀な
学生も多く、起業して成功し
ている人や、飛び級で入学し
てきた人もいました。また、
イエール大学には教員食堂が
なく、教員は学生寮の食堂で
食事をするので、授業外での
教員と学生の交流が活発でし
た。夜遅くまで試験勉強をし
ている学生にドーナツを差し
入れたり、ディスカッションに
加わったりするなど、学生と
の距離が近く、フレンドリーな
雰囲気にあふれていました。
そうしたことも含め、アメリカ
での経験を日本の教育に活か
すべく帰国しました。

アメリカで多くを吸収し
た斉藤さん。真の学び
のあり方を伝えるために、
いよいよ日本で塾を創立。
その教育法の極意とは？
3月号に続きます。

英語ができれば、

Hello! WORK

「英語ができれば、^{いらい}将来どんなことができるの?」…そんなみなさんからの疑問にこたえるべく、
英語や外国での経験を生かしながら日本や世界で活躍するさまざまな方にお話をうかがいます。

文：高橋和子 写真：編集部

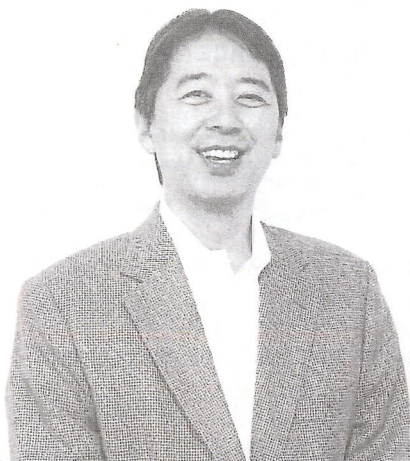
FILE. 6 後編

英語塾経営者

斉藤 淳さん

Saito Jun

J Prep代表。上智大学外国語学部英語学科卒業。同大学国際関係論専攻博士課程前期課程修了後、カリフォルニア大学ロサンゼルス校大学院を経て、イエール大学大学院政治学専攻にて博士号（政治学）取得。フランクリン・マーシャル大学助教授などを経て、2008年イエール大学政治学科助教授に。2012年に帰国し、東京都と山形県で英語と教養を教える私塾を創業。著書に、『世界の非ネイティブエリートがやっている英語勉強法』（中経出版）、『10歳から身につく問い、考え、表現する力 〜ぼくがイエール大学で学び、教えたこと』（NHK出版）など。



※3月6日（金）放送の「This Week's Special [This Month's Interview!]」もあわせてお楽しみください。

※インタビューの前編は2月号に掲載されています。

小学生のころからジャーナリストにあこがれていた斉藤さん。アメリカの大学に留学したことをきっかけに学問の楽しさに目覚め、学ぶ中で、日本の教育を変えたいと思うように。そして、アメリカで培った経験を携えて帰国。東京と山形で塾を立ち上げました。

英文和訳よりも
五感をフル活用した
英語学習をすすめたい

——斉藤さんが重視する英語学習法について、聞かせてください。

日本の英語教育は、文法を覚え、英文をひとつひとつ日

本語に翻訳して意味を理解するという、いわゆる英文和訳を重視してきました。ですがこの学習法は、日本語を介するために意味の把握に時間がかかりますし、声を出して他人と意見をやりとりする能力は養えません。英語を英語で理解するためなら何でもやろう!



スタジオでの1枚。
イエール大学時代の
ことを中心に終始話
題がつきず、楽しい
ひとときとなりました。

と考えていますが、たとえば「Total Physical Response Approach (全身反応教授法)」もそのひとつです。ふつうは低年齢向けなのですが、中学生や高校生にも有効です。
——具体的に方法を教えていただけますか？

たとえば、“Stand up.”と言いながら、実際に体を動かして立つ。寒いと感じたら、“It’s so cold!”と言いながら窓を閉める。におい、手ざわり、味など、五感を総動員して英語を体にたたき込んでいくのです。自分の体で体験できないことは、ことばと情景をセットでとらえる訓練をすると思います。たとえば、drivewayという単語を辞書で引くと「私有地の車道」という意味が出ていますが、何のことかさっぱりわかりません。アメリカの家庭のdrivewayが映っている映画などを見れば、「ああ、あの道のことだな」とイメージをつかむことができます。こういうイメージを多く持つほど英語力は高まります。
——話す力、聞く力がつく学習法とは？

音声聞いたそばから復唱する練習方法を重視しています。

発音は、強調しすぎるくらいでちょうどいいと思っています。

たとえば、「hat(帽子)・hut(小屋)・hot(暑い)」の発音のしかたや音のちがいを理解するために、手鏡で口もと

を見ながら発音練習する方法をおすすめしています。

——書く力、読む力がつく学習法とは？

たとえばわたしの塾では、アニメなどの映像作品を見てセリフを想像して書く「英釈文」や、ざっくりとしたテーマにもとづく自由な英作文を奨励しています。また、わからない単語は辞書に頼らず、先生に「How do you say ~ in English?」と聞くように指導しています。辞書では自然なニュアンスが探せないケースが多いからです。先生に聞くことで発音もわかり、ほかの生徒たちの勉強にもなります。そして、自分の意見を表現する楽しさを知ってほしいので、

英語塾の経営 ってどんな仕事？

英語上達を目指す子どもたちを対象に、効果的な英語学習法と学習の場を提供する仕事です。わたしは経営者であると同時に現役教師でもあり、これまでに小学1年生から高校3年生まで教えたことがあります。現在経営する塾の生徒は、中学生と高校生が中心です。単に受験に備えるための英語学習だけではなく、国際社会において通用する、話す力、聞く力、書く力、読む力、それに加えて、自分の意見をしっかりと持ち、表現し、ディスカッションできる力が養えるような英語学習の場を提供しています。そうした教育方針は、自分のアメリカ留学の経験にもとづいています。実践的な英語塾を通じて、日本の英語教育に新しい風を吹き込めたらと思っています。

明らかなまちがい以外は指摘しないようにしています。

都会から離れた 地方の町でも 最高の英語教育を

——現在、東京と山形に教室がありますね。

東京は国際都市であり、英語教育に熱心な土壌もあります。行政や学校関係者に英語教育のあり方について提言していくうえでも重要な拠点です。それと同時に、都会から離れた地方でも自分が理想としている英語教育を実現したいと考え、故郷の山形県酒田市に教室を開きました。現在、動画を活用した独自教材の開発を進めており、ゆくゆくはそ



提供したいのは、
自分の意見を表現豊かに伝えるための
スキルをみがける教育の場です

の教材をもとに指導できる講師を育成し、日本全国に教室を増やしていけたらと思っています。

**中学・高校時代は
NHKラジオ講座を
聞くのが日課でした**

——ご自身の中学・高校時代にいちばん身についた学習法についても教えてください。

中学時代は、NHKラジオ講座の「基礎英語」「続基礎英語」を毎日2回聞いていました。朝はテキストを読みながら聞き、夕方の再放送は、父が運転する車の中でテキストなしで聞いていました。パートに出て

いた母を父と車でいっしょに迎えに行くのが日課だったのです。そのくり返しがスキルアップにつながりました。むずかしいと言われる関係代名詞の使い方も、耳で聞いて自然に覚えました。また、レンタルビデオが普及し始めた時代だったので、洋画をくり返し見てネイティブ・スピーカーの言いまわしを覚えました。あと、NHKの7時のニュースを英語の副音声で見るのが楽しみで、この習慣も知らずとためになっていたと思います。ただ、英語のテストのための勉強は苦手で、学校の成績も上位というわけではありませんでした。

ありがたかったのは、英語の先生が特別に目をかけてくれたことです。本来は中学3年生が出場する英語の弁論大会に2年生だったわたしを出場させてくれて、それに備えて何日も発音の特訓をしてくださいました。わたしなりに英語に親しんでいることをわかっていてくれたのでしょうか。この特訓で、発音記号さえあればどんな単語でもほぼ正確に発音できるようになりました。——今後の展望を聞かせてください。

今、日本の英語教育が大きく変わろうとしています。「インプット」重視の教育から、「アウトプット」重視の教育に移行する中で、自分の意見をしっかりと持ち、それを表現豊かに伝えられるスキルをみがける教育の場を提供し続けていきたいと思っています。

斉藤さんに聞く

5つの質問



1

10代のころにやっておいてよかったことは？

留学先では、ネイティブ・スピーカーと意思疎通ができないと何も始まらなかったのも、中学・高校時代に音読を熱心に行っていたので、中学・高校時代に音読を熱心に行っていたので、教科書に登場するような偉人たちの哲学書や思想書をたくさん読んだこと。政治学の分野で学問を修めることができたのも、読書のおかげだと思っています。もうひとつあげると、プログラミング言語を学んだこと。論理的な誤りが許されない人工言語の構成方法を学んだからこそ、人間が日常使う自然言語のあいまいさや豊かさに気づくことができて、英語への興味も深まりました。

2

英語の勉強で苦勞したことと、その乗り越え方は？

3人称単数（一般動詞の現在形）の“s”をなぜつけなければならないのか、という疑問にぶつかって苦勞しました。今、塾で教えていても、3人称単数でつまづく生徒が多いんです。そこで、「おれ、ハラヘった」という表現は自然だけれど、「おれはおなかですきました」という日本語表現はどこか不自然で、それと同じように主語の個性によって動詞の語尾が変わるのだと教えています。日本語にも英語にも理屈では説明できないルールがあるので、自分なりに納得できる理屈を見つけて、たくさんの事例を見聞きして、感覚的に覚えるしかないのかなと思います。

3

英語ができたから〇〇ができた。この〇〇に入ることは？

ずばり、日本語です。特に、翻訳や他人の英論文和訳の添削を経験したことで、日本語力がつきました。英文和訳は英語力の向上に必ずしもつながらないと思いますが、皮肉なことに、日本語を介するゆえに国語力はつきます。和文英訳にも同じことが言えるようで、イェール大学の英作文チューター（教授補佐）に日本文学で修士号を持っている人がいたのですが、和文英訳を通じて飛躍的に英語力が向上したと言っていました。英語重視の教育によって日本語力が低下するという議論もありますが、わたしはその心配はないと思っています。

4

英語教育に携わる仕事をするにはどういう資質が必要？

どの教科にも言えることですが、勉強にたづなっている生徒を見て、何が原因でそうなっているのかを想像できる能力ではないでしょうか。わたしは、予備校の講師をしていたときに、成績優秀な生徒から勉強が苦手な生徒まで、いろいろな生徒と接しました。わたし自身、アメリカに留学した際は、論文作成やネイティブ・スピーカーとのやりとりで悪戦苦闘しました。そうした経験を通じて、つまづいている原因を考え、それを取り除く説明ができるようになりました。また、全部を教えず、自分で調べる余地を残すような配慮もしています。

5

読者のみなさんにメッセージを！

わたしの英語力の土台となったのは、中学時代に聞いていた「基礎英語」「続基礎英語」です。みなさんにとって「基礎英語2」がそうなるといいと思います。ひとつアドバイスしたいのは、「1日もサボってはいけない」などと、完ぺきを目指しすぎないこと。サボっても罪悪感にとらわれない余裕を持つことが意外に大事で、そのほうがずっと長続きするはずですよ。また、英語は何歳から始めても遅いということはないので、大人世代の方々も、スポーツの英語中継や洋画鑑賞など、自分の興味に関連づけたりしながら楽しんでほしいと思います。

Hello! WORK FILE

4・5月号



映像プロデューサー
早崎 宏治さん

6・7月号



カフェマネージャー
平井 幸奈さん

8・9月号



観光ガイド
丸野 光一さん

10・11月号



フリーアナウンサー
藤本 ケイさん

12・1月号



外資系スポーツ用品商社勤務
谷田部 馨信さん

2・3月号



英語塾経営者
斉藤 淳さん

「英語ができたらHello! WORK」は来年度も続きます。また、2月号、3月号にわたってインタビューを行った斉藤淳さんの英作文の新連載もスタートします。どうぞお楽しみに！